

保全の対策を考える

地域の生態系を典型的に表している生きものを保全する

農村では田んぼなどの放棄により生きものの生息環境がなくなってしまった場合が少なくありません。このような場所では、本来の生息環境を復元することにより地域の生態系を典型的に表している生きもの全体を復活させることを目指します。

●谷津田斜面の草地の生きものの保全を考える

谷津田の斜面は放置すると林になり、田んぼに日が当たらなくなります。そこで田んぼから一定の幅の斜面は田んぼの持ち主のものになっているか、そうでなくても田んぼの持ち主がいつでも刈り取ってもよいという慣行がありました。このような場所は草地になっていて、秋に咲く花の宝庫でした。それはイネの生育期間はこまめに刈り取られるが秋になると草刈りの回数が減るからです。

オミナエシやマツムシソウなど秋に咲く花は秋に生息するチョウなどの重要な蜜源ですし、こうした草地や土手はマツムシが好んで生息する場所です。そこで谷津田ではつぎの調査をします。

- ①地元の慣行で斜面のどの位置までが草地だったかを明らかにします。
- ②そしてその場所で広い範囲を歩き、草原性の植物(オミナエシやマツムシソウなど秋に開花する植物だけでなく、ススキ、チガヤ、シバなど草原性のイネ科植物)が残っているかどうか調べます。
- ③草地を復元する場所を決め、そのなかに永久コドラート(調査区)を数カ所設置し、継続的に植生を調査します。

現在は草原性の植物が見られなくなってしまった場所でも、管理して草地にすると、埋土種子が芽生え、草原性の種が復活することもありますので、気長に調査しましょう。



マツムシ



オミナエシ



マツムシソウ



ススキ

● 湿田環境の生きものの保全を考える

田園自然再生活動のなかでの生きもの調査の目的は、その結果を生きものの生息場所の復元に結びつけ、復元した生きものとその生息環境を「田んぼの学校」などの学習に活用することです。そこで都市住民を対象にした「田んぼの学校」を開催し、都市住民に調査の主体を担ってもらいながら、地域の子どもと都市の子どもの両方を対象に生きもの調査を行います。

農村での生きもの調査は、都市住民にとっても大きなメリットになります。それは農の自然が都市地域の過去を知る場としての役割も持っているからです。農村部には昔の状態を教えてくれるお年寄りもいますから、都市の過去の環境とそこにすむ生きものが復元できれば、都市部からの参加者は自分たちの地域の昔にタイムスリップして体験学習することが可能になります。

このときに保全・復元の対象となる生きものは、地域の生態系を典型的に表している生きもの全体ということになり、その多くは湿田の生態系です。



保全・再生への取り組み事例

過去の環境を復元した場で開催している「田んぼの学校」

特定非営利活動法人 古瀬の自然と文化を守る会
(茨城県 つくばみらい市)



特定非営利活動法人 古瀬の自然と文化を守る会は、茨城県つくばみらい市（旧谷和原村）の古瀬に昭和40年代に存在した農村環境を復元しています。古瀬は小貝川のかつての河道（蛇行部）で、江戸時代に小貝川から切り離され、水田として使われてきました。しかし水位調節が難しいため、この水田（湿田）は1970年代以降放棄されていました。その結果、水路は泥で埋まってヨシが繁り、水のない状態になっていました。この湿田が耕され、水路に水が入れば、春になるとコイやフナが水路から水田にまで入ってきて産卵し、昔のように小魚でにぎわう環境が復元するはずでした。

古瀬がある寺畑地区の住民は、かつての環境を取り戻そうと、水路を長さ1kmにわたって復元し、湿田（10aと13aの2枚）と沼の開水面も復元しました。その結果、川からコイ、ギンブナなどが多数上ってきて産卵し、小魚の多い水路が復元しました。

その姿は昭和30年代の葛飾区の田んぼそっくりでした。そこで葛飾区立郷土と天文の博物館と提携し、この古瀬で葛飾区民を対象に「田んぼの学校」を開催することにしました。

参加者は年々増加し、現在は大型バス2台（多い時は3台）で来るほどになっています。復元された田んぼを活用する人が増加したので、さらに3枚の復田が可能になり、それにつれ多くの生きものが戻っています。これらの生きもの（おもに魚類）を、サポーターになってくれた都市住民が、毎年数回、定期的に調査しています。